ぼくら先生のペンダント

ろう学校のベテラン先生が
小学校の新米教師になって

小山巧子＝著
広島県熊野第二小教諭

一光社

■著者略歴■
小山　巧子（こやま さとこ）
昭和11年，広島市生まれ。
昭和32年，広島大学教育学部（短期）卒業。
山口県立聾学校、広島県立呉聾学校、広島県立広島聾学校で22年間聾学校教諭として勤務。
昭和54年，広島県安芸郡熊野町立熊野第二小学校に勤務、今日に至る。
住所 〒736 広島市安芸区矢野町東7－30－14

ぼくら先生のペンダント　　定価980円　〒250

1984年8月5日　初　版

著　者　小山巧子
発行者　鈴木大吉

〒113／東京都文京区本郷1－30－18
発行所　株式会社　一光社
電　話　東京（813）3061
振替番号　東京4－181221

万一落丁・乱丁の場合はおとりかえいたします

ぼくら先生のペンダント

ろう学校のベテラン先生が
小学校の新米教師になって

小山巧子＝著
広島県熊野第二小教諭

光社

はじめに

いつのころからか、私は、子どもたちをダイヤモンドと呼び、ペンダントと呼ぶようになった。

「君たちは先生の誇りだよ」

「先生、ほこりってごみのことね」

「ちがうよ、ちがうよ。誇りってね、何といったらいいかしら。自慢、そうだ、自慢だよ。まあ、私の心の勲章だわ。三十八こもダイヤモンドの勲章をもってて、先生ってすっごくお金持ちなの。心の中がね」

「先生、勲章って何ね」

「お前、勲章知らんのか？　ありゃあの、王様なんか胸の所にいっぱいつけとるじゃろうが。あのぶんよ」

「ああ、ああ、あのペンダントみたいなやつか。へえ、先生はあんなん好きなんか」

「そう。私、あんなん、大好きなんよ」

「ぼくら、先生のペンダントなんか」

「そうよ。私の一ばん大切なペンダントなの。いっつも光っとってえよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

物識りの福本君の助けを得て、私が子どもたち全員をいつも首にかけていばっていることをみんなにわかってもらった。

このペンダントたち、時には誇ることもできないようなことをやってのけて、私の胸からころげ落ちるが、のびやかで心優しく、それ故、邪なる心も働かす私には一面こわくもある。

私が、広島市の郊外のこの学校、熊野町立熊野第二小学校に赴任してきたのは、ペンダントたちが入学する一年前のことである。それまでの二十ウン年間は、音の世界から隔てられた聴覚障害児たちと学んできた。だから、小学校ではいわば「新米」の先生なのである。「新米先生」は、何を見ても珍しく、何を聞いても驚いた。二十ウン年も歌声から遠ざかっていたので、幼い子たちが歌を歌うのを聞いて神業かと疑った一瞬もあった。毎日が新発見の連続だった。感激のあまり涙を流し、他の先生方にとっては、ごく当然のことに狂喜して躍り上がったこともあった。

その「新米先生」の泣き笑いの日々に興味を示し「書いてみないか」と熱心に勧めて下さる方があらわれた。一光社の鈴木さんである。降って湧いたようなというけれど、ほんとうに思ってもみなかったことなので、私はそらおそろしく、真剣に悩み、考えに考えた。ずい分と長い間、祈り、問い返し、また祈った。いちばん気になる植田君の御両親にも相談した。

「息子が、健常児の中でこんなに幸せに学校生活を送っていることが、みんなにわかってもらえたら、よそでも息子のような子が幸せになれるかも知れないから」

と快く承知して下さり、実名で書くことを勧めて下さったお二人に励まされて、私は鈴木さんに手紙を書いた。

「大それた事ですが、清水の舞台からとびおりるつもりで書かせて頂きます」

と。もちろん、何もわからないのだから、百パーセント鈴木さんの御指導を仰ぐことになるのだけれど。

私は、特にかわったことをしてきたとは思っていない。ろう学校で学び、実践してきたことをそのまま小学校へ移したに過ぎない。なぜ、どこに鈴木さんが興味をもたれたのか未にいぶかしく思える。だけど、自閉的な傾向の強い植田君を中心に三十八人の幼い仲間たちと共に歩んだ歴史を形あるものにして残しておくことは、三十八人の子どもたちとこの子たちを支えて下さった三十八組の家族の方々にこたえるためにも、私を含めて三十九人の学級を見守り応援して下さった前校長中村泰造先生、現校長楠土重蔵先生、本岡トシエ教頭先生、そして職場の仲間たちへの感謝を表すためにも必要なことのように思えた。

おそらく、一生巡ってくることはなかっただろうこの貴重なチャンスを与えて下さった上に、遅々として筆の進まぬ私を、絶えず励まし、力づけて下さった鈴木さん、ほんとうにありがとうございました。

目次

はじめに　3

I　学校はだれのもの

「あの子」の担任　10
ぼくは元気です　18
先生にも係ちょうだい　30
誰にでも怖いものがある　39
学校は親と教師と子どものもの　44
学級通信「ふたば」　47
最も人間らしい人間——植田君のこと　54
ぼかあ、「ふたば」のファンじゃけえ　61

II　子どもが主役の学級

「知らないよ」「教えて」と言える子に　68
子どもの仲間になれた日　73

「必要だから書く」までの一か月　80
かしてください　88
おしっこ時間は自由　98

III　活躍し始めた子どもたち

「死ね」と言われるうれしさ　108
植田君が欠席した教室　112
やった！　ピースじゃ　118
生まれて初めてした「援助」　123
ワルサー博士の「ゴメンナサイ」　130
班からの家出　139
一学期最後の日　144

IV　伸びゆく若木

よい子の木　156
運動会での不安と感激　166
植田君をばかにするのは、ぼくらをばかにすることなんよ　174

遅くても仕事させてやってくれや　178
さんしちにじゅういち　183
それでも孫はかわいいです　188

V　いやなことは「いや」と言える子に

先生は、わたしたちが嫌いになったんですか　200
苦しい理屈のお説教　205
熊野っ子と東京っ子　209
一人じゃさびしいよ　214
遠足登山　222
先生も、ようがんばったね　230
先生、ぼくらはええけえ、マックンをたのむ　233
あとがき　247

I

学校はだれのもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あの子」の担任

広島市の中心部から東へおよそ二十キロ。郊外バスに揺られて山あいに入って眠気を催し始める頃に突如現れる高原の小さな町。ここでバスをおりられるのなら便利なのだが、私の学校はここから更に奥へ入らねばならない。奥まで入る便は一時間に一本しかないので、運転免許をもたない私は何かといえばタクシーに頼り、赴任して一年も経たぬ間に、

「もしもし……」

とタクシー会社に電話をかければ、即座に

「あ、小山先生。今日はどこにいるんですか」

と言ってもらえるような常連になってしまった。

ここ安芸郡熊野町は、国内の毛筆の殆どをわが町で生産していると誇らかに言える筆の町である。高原の風はさわやかで緑あふれるこの町は、大きな団地をかかえているのに、広島市へ通じる道路は一車線のせまい道路で、通勤ラッシュの時間帯には、はっているような自家用車が連なり、間をぬって走る白ヘル軍団が横行する。市内への時間がかかりすぎるためか、私どもの校区からは私学をねらおうという私学進学熱はまず問題にしなくてもよい。町内一不便な場所のわが

校区には、病院が一軒もない。喫茶店もないし銀行もない。小包を発送したければ、一時間一本のバスで出かけねばならない。

そんな所でも、年々児童数がふえ、一学級卒業しては二学級入学をくり返し、現在は十二学級になった。

事務の田島さんから、来年度の入学予定児童が七十人をこしているという話を聞いた。その中に、少し発達にもつれのある子どもが二人いる事も。転勤した年の秋のことで、明日何事があるかの予測もつかず、めかくしをして走るような不安だけを感じていた毎日だったので、その事は文字通り「話」であって、私とは何の関わりもないことであった。

昭和五十四年秋のある日――入学時検診で、例の二人の子どもは丸子先生が個人面接を受け持って、個別にテストを受けた。丸子先生は、「全くテストにかからなかった」と頭をかかえて職員室に戻ってきた。障害児学校で長い間、障害児をかばうような生活を続けてきた私は、少々むっとした。

〈「全く」とは何事か。この子にテストが合わなかっただけじゃないの。不向きなテストを使わず、この子に合ったテストをもってくればいい。簡単なことじゃないの。日をかえてやってもいいんだし。小学校の教員はたるんどるよ〉

不遜にも私は、こんな事を考えて一人で白眼をむいてむくれていた。
仲間たちは、この子が入学してきたら、当然担任は私だと冗談めかして言った。いや、この子たちが入学するのだ。しかし、私は、まだ受け持って一年にしかならない現在の学級を手放せとはよもや言われはしまいとたかをくくっていて、いつとはなしにこの子たちのことを忘れてしまっていた。何しろ、現在の学級に私の心を百パーセント向けていなければどうにもならない子たちがいく人もいたから。
この「もし」が本物になって私を襲った。
「まことに言いにくい事じゃが……」
それは、気の弱い校長先生には間違いなく言いにくい事であったろう。校長室へ来てほしいと私をよぶ時から恐縮を絵にかいたような風情で、却ってこちらが恐縮してしまうほどだった。校長先生のこの一言で、私は「あの子」のことを思い出した。そしてそれは「当たり」だった。
校長先生は、教育委員会から「あの子」がわが校に入学する事を知らされてから、ずっと担任の人選に悩んできたという前置きの後、
「こう言っちゃ何じゃが、幸い、あんたは障害児教育の経験があるし、ほかに受け持ってくれそうな人がいないから」
と、非常に消極的な言い方をして、静かに私の返答を待つ態勢に入られた。

〈冗談じゃない。障害児といっても色々ございます。確かに私は二十年余りも障害児学校で育てて頂きました。感謝もしてますし恩返しもしたいと思いますよ。だけど、私が共に差別と闘ったのは聴覚障害児でした。今度入学する「あの子」は自閉症だというじゃないですか。自閉症児の教育の経験がないというのは他の先生も私も同じです。スタートラインはいっしょです。おまけに、聴覚障害児も自閉症児も一からげに見るなんて無知も甚だしいです。いいかげんにして下さい！〉と、口に出しては言わなかった。心の中では、もっともっとひどいことを、教養ある私としては恥ずかしくて書けないような下品な言葉でわめきかえしていたけれど。

だが、悲しいけど十学級にもみたない小規模校であってみれば、四十路をこえたおばはんが、年甲斐もなくごね通してみてもはじまらない。わが校の職員構成からみて引き受けるしかないか。重い荷を負う子をたらい回ししたり、多分、しんどいだろう仕事を人の肩に移そうとあがくのも大人気ない。だが、だが。うーん。あんまり言いたくはないけれど、私が障害児学校をとび出した目的の一つは、障害が一応はないといわれる健常児と、障害を背負うている子とをいっしょに教育する、統合教育の実践をしたいということであった。

ろう学校にいたころ、私は、聴覚障害児を地域の学校に受け入れて頂くようにお願いに行って、その度に色よい返事をもらえず、情け無い思いを幾度もした。学級集団が崩れるとか、どうやって教えればよいかわからないとかという理由が主だった。私は、自分で体験してみないことには

説得力がないと思った。自分が小学校に出て障害児と健常児とを共に学ばせてみたら、困難点もわかるし、受け入れた健常児たちがどう変わるかもわかって、お願いのしようもあろうと思えた。うまくいくと、聴覚障害児だけでなく他の障害をもった子も地域の小学校へ受け入れてもらえるようになるかもしれない。そう思って今の学校へ転勤したのだった。

ならば、意外と早くめぐってきたチャンスに感謝せずばなるまい。ままよ、自信も津波もないけれど、諸般の事情に鑑みて、引き受けるしかないか。

人間というものは、いや、私だけが天才的なのか、ほんの短時間でずい分とたくさんの事が考えられるものだ。この上、私はまだ、自分が何とか楽をする方法はないかというたくらみまでしていた。後で考えたら、このたくらみはとても重大なことなのだったが。

「校長先生が、お前以外に適任者はないっておっしゃって下さることは光栄なのですけれど……」

もう一人の私がささやく。

〈うそつけ。光栄なんてオーバーな。ほんとはちょっとでも楽がしたいくせして。それを見ぬかれないためにニコニコしてるだけじゃないか〉

たてまえの私、

「自閉症児ってどんなんだか見当もつきませんし……」

本音の私、

〈またまた。ろう学校にいたじゃないか。もとかちゃん、こうちゃん、なおみちゃん。あんな風なんだよ。丸本先生から雑誌のコピーをもらったり、学年会でケース会議めいたこともしたじゃないか〉

たてまえの私、

「教室から出歩いたり、教室であばれたりしたらどうしましょう。その子もですが、他の子の安全が守ってあげられないなら大変です。とても私一人じゃ対処できませんよ。それに、その子のための特別のカリキュラムも作らなけりゃならないでしょうし、教具もいります。記録だってとらなくちゃいけません。そんなこと相談したり、手伝ってもらったりする人を一人つけてほしいんです。まあ副担任ですね」

ついにたてまえの私と本音の私が合体した。

「すまんの。引き受けてくれるか。幸い今年から担任外の先生が一人ふえるんじゃ。その先生にでも副担任になってもらおうかの」

こうして、たてまえも本音もなく、とにかくどんな子なのか、どう教育すればよいのか見当もつかぬまま、「あの子」は私の前に姿を現わした。〝超過保護〟と肩書きのついた「あの子」は、植田雅城といった。私は学校中でだれよりも早く担任が決定した。そう、一年二組の担任でなく、植田君の組の担任が。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com